世間解　第四二八号
令和五（二〇二三）年　十月
発行　西法寺

念仏もうさるべし

―聖徳太子に聞く（その六）―

十月であります。皆さまにはご本願のおはたらきの中「なんまんだぶ、なんまんだぶ…」とお念仏ご相続のことと存じます。

親鸞聖人が法然聖人のお弟子になってくださる大きな機縁となった聖徳太子のご示現（夢の告げ）をめぐってお聞かせをいただいております。

行者宿報設女犯　我成玉女身被犯
一生之間能荘厳　臨終引導生極楽

という聖徳太子ご示現（夢告）、すなわち観世音菩薩さまの告げは、そのまま「在家を仏道化してゆく道」があるのだという示唆でありました。やがて親鸞聖人は恵信尼さまと僧侶として公にご結婚をなさいます。本当の在家仏教の始まりであります。

親鸞聖人は生涯にわたって恵信尼さまを、ともに仏道を歩み自分を導いてくださる〈観音さまの化身である。〉と思われていたに違いありません。『恵信尼消息』ともうしあげるのですが、親鸞聖人がご往生になられたという知らせをうけた恵信尼さまが越後から季娘の覚信尼さまに宛てたお手紙が残っています。

その中で、恵信尼さまは覚信尼さまに、

今まで誰にも申しあげなかったけれども私は親鸞聖人のことを普通の方とは思わずに（観音さまのご化身であると）ご一緒させていただいておったのですよ。

とお書きくださっている文章があります。

親鸞聖人と恵信尼さまはお互いがひそかに相手のことを観音さまのご化身であると敬いながら在家仏教というお念仏の日暮しをお送りになっておられたのであります。梯實圓和上の『親鸞聖人の信心と念仏』というご本の中からそのお味わいをお聞かせいただきましょう。

親鸞聖人ご夫婦の間にも、さまざまなことがあったに違いありません。五年にわたる越後での流人としての苦難を二人が力を合わせてくぐり抜け、さらに小さい子どもたちを抱えて、なじみの薄い北関東での教化生活は、特に恵信尼さまにはつらいことが多かったと思います。さらに最晩年になって、京都と越後に別れて暮らさなければならなかったことは、悲しいことだったと思います。しかしそうした中で、お互いが我が身のことよりも、相手のことを思いやりながら生きる二人の念仏生活の中で、自然と深まっていったのが、、互いが相手を観世音菩薩と敬い、仰ぐ想いでした。阿弥陀仏の大悲本願の念仏は、そのような暖かく、しかも強靭な信頼関係を生み出していったのでした。在在家仏教というのは、このように家庭生活の中で仏法の真実を確かめ合い、浄土を目指して生きる人生を築いていくことだったのです。このへんのところを私たちははっきりと確認しておかねばならないのではないでしょうか。

私たちは残念ながら出家をして特別な修行をしたり山に籠もったりして一筋に仏道を歩み真実を求め実現することはかないません。そんな私たちの日暮しに仏道がはたらきかけてくださっている。阿弥陀さまのご本願のおはたらきが私の日暮しを包んでくださっている。

親鸞聖人と恵信尼さまのご生涯は、私に間違いなく“あなたの日暮しのままで、日暮しの中に仏道を味わうことができるのだよ”いや“仏道を歩む日暮しなのだよ”とお教えくださっておるのでありましょう。合掌